

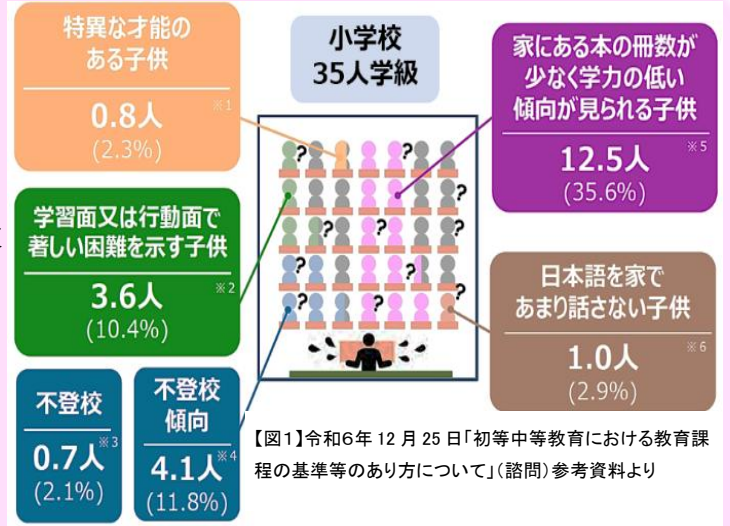
一人の子供も取り残されない「多様性を包み込む」学びの環境をつくるために
～アセスメントを活用し子供が安心して臨める授業デザインを考える～

研究の背景・内容

多様性を包摂する学校が必要とされる今、「どの子も持てる力を最大限に発揮できる授業」とは

現在、学校には多様な背景や特性のある子供たちが在籍しており、多様性の包摂がより一層必要とされています(図1参照)。こういった状況から、「一人の子供も取り残さず、どの子も持てる力を最大限に発揮できる授業」の在り方について、調査研究を進めてきました。まず、令和6年度に調査研究を行ったUDLの理念「学びの主体者は子供である」という考えから、授業デザインについて、次の視点を取り上げました。

- ・教師は子供が自分に合った学び方で学んでいけるよう、学び方を選べるような授業にする
- ・子供自身が自分に合った学び方に気づき、活用できるように支援する
- ・この2点の土台となる温かい学級づくりをする



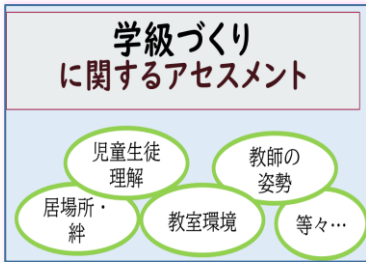
【図1】令和6年12月25日「初等中等教育における教育課程の基準等のあり方について」(諮問)参考資料より

上記の視点から教師が授業デザインを考えるにあたり、今年度は児童生徒の実態を多面的・多角的につかみ指導・支援の方向を決め出していく、「アセスメント※1の活用」に注目し、実践校への視察・取材を行いました。そこで得た学びを整理し、教育現場において授業をデザインしていく際の手がかりの一つとなるよう、本事例を紹介します。

※1アセスメント: 児童生徒の状態像をより深く、的確に理解し、効果的な支援の指針をつかむこと(国立特別支援教育総合研究所)

事例からの学び

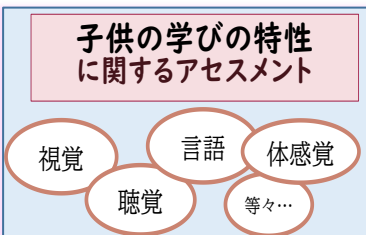
以下の2つの分野のアセスメントを活用している県内4つの小中高等学校にご協力いただき調査しました。



「学級づくり」に関するアセスメントツール「QU」「アセス」の活用事例について

- ・ 専門家を招いて結果を基にアセスメントを行う職員研修を実施。児童理解が深まり、チーム支援が充実した。
- ・ 学年会や教科会で結果を見合いながら考察を行うなど、児童生徒理解に関する共有が効率的に行えた。
- ・ 個別懇談の機会や内容の手がかりとし、タイミングよく生徒指導ができた。
- ・ グループ分けの資料としたところ、子供の人間関係づくりが進んだ。など

「QU」「アセス」などのアセスメントツールは、知っている方も多いと思います。活用についてぜひ参考にしてみてくださいね。



「学びの特性」に関するアセスメントを授業デザインに活用している事例について

「子どもを真ん中にやわらかく包み込む東部中」
伊那市立東部中学校

伊那市立東部中学校(R6 学びの改革パイオニア校)の実践を調査しました。詳細について、次ページで紹介します。



東部中が今回取り入れたアセスメントツール「spaceQ」。「自分の情報処理の得意・不得意といった認知スタイル」や「自分の学習方法や取組の傾向」をグラフやレポート形式で本人にフィードバックできます。

spaceQ 授業活用
のための説明動画



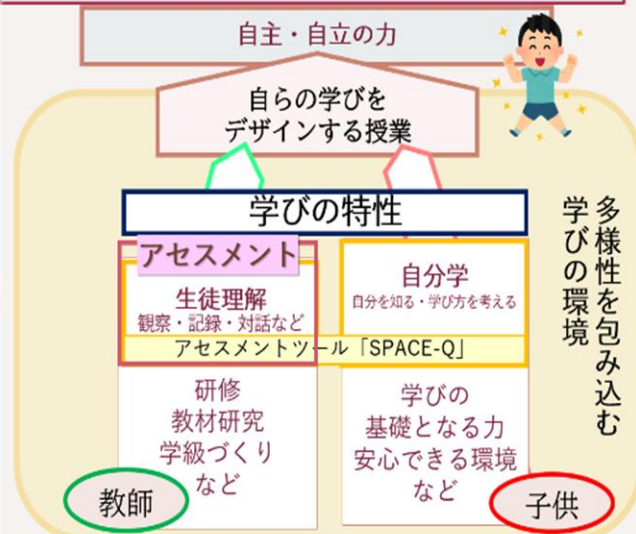
spaceQ を活用した
文科省実証報告書

タブレット端末を活用するアセスメントツールを使って…「自分学」

東部中学校 研究テーマ： 自分を知り、学び方を考える

東部中学校は「自主・自立」「多様な学び～自己理解から～」の二つを柱に設けて研究を進め、以下にまとめた図2のようにアセスメントを授業デザインにいかし、取組を行っていました。

自らの学びをデザインする授業とアセスメントの関係性



(伊那市立東部中学校の取組より) 【図2】

自主・自立の力の育成を目指して 教師主導型の授業から

「自らの学びをデザインする生徒主体の授業」へ

- 令和6年度よりアセスメントを取り入れ、個々の認知特性や思考スタイル等の学びの特性を把握する取組を開始
- 特別支援教育コーディネーターによる「学びの特性」に関する職員研修
- 「学びの特性」を見える化するアセスメントツールを取り入れたアセスメントを実施
- アセスメントツールのフィードバックをもとに、生徒が自身の学び方を見つめ直す「自分学」を全学年で実施
- 全教員がアセスメントツールの結果をもとに学級や個人の特性を分析
- 子供たちの「学びの特性」をクリアに
- 分析結果をもとに授業改善の方向性について教科ごと協議
- 教師は生徒の学び方の特性をいかした授業づくり
- 生徒は「自分学」を通して自らの学び方で学ぶ

教師と生徒が双方で授業をデザイン

上記の取組により「多様性を包み込む学びの環境」が生み出されていました

令和7年度公開授業テーマ「生徒が自らの学びをデザインする授業」

令和7年度は国語・理科・英語を中心とした授業研究を進めた東部中。視察や取材を通し、アセスメントの活用に関して3つの視点で学ばせていただきました。

1、授業デザインへいかす

- 変化していく生徒の思考スタイルを見極めて、課題や活動内容を工夫した
- 「言語活動」が得意な生徒が多いことが分かり、発表の場面で「対話」を取り入れた
- 学び方について生徒が振り返る時間を設け自己理解につなげた
- 自分がその時学びたいスタイルを選択して追求する、という方法を取り入れた など

「色々な学び方の子がいていいんだよ」というメッセージを出し続けています



安心して関わり合う中で成長し、自分で考える力が付き、自立していく姿があります

3、教師の意識

- 「色々な子がいる」と何となく主観で認識はもっていたが、アセスメントはその後ろ盾となった
- 変化する思考スタイルに合わせて、授業をデザインしていきたい
- 学習問題に対して課題が据わっていれば、安心感と自信をもって学び方を自ら選択していけると実感した
- 勤や感覚だけでは多様性の時代に対応しきれない、データを生かしたい
- 主体的に学ぶ態度を育てるための方法として有効だと感じた など

アセスメントを活用したら、子供たちのよさをもっと引き出したいとなりました



2、子供たちの変容

- 主体的に学ぶ授業スタイルに変わっていく姿がある
- 自分から挑戦していくタイプへと思考スタイルが変化した
- 「見るよりやってみる方が良い」等自分を知るきっかけとなった
- 生徒主体の授業の積み上げによって、学び方の自己選択や自己決定の力が育っている など



アセスメントを授業にいかすことで、目の前の子供たちの多様な「学び方」を整理し、自主・自立の力を育むための授業デザインの方法をより具体的にしていた東部中学校。アセスメントによって、生徒一人一人への理解が更に深まり、その理解を適切な支援につなげていました。また、アセスメントツールを活用することで、子供たち自身の自己理解に基づく、主体的に学ぶ態度の育成や、より効果的なチーム支援が促進されていました。そして、教師と生徒双方が授業をデザインすることで、どの子も安心して学べる環境が生まれていく過程からは、アセスメントのより良い活用の方向を学ばせていただきました。

アセスメントの活用について県内の事例を紹介いたしました。ぜひ「どの子も安心して、持てる力を最大限に発揮できる授業」をデザインしていく際に、視点の一つとして参考にしていただけたらと思います。